玄遠俳句

令和7年 4月号

枝垂梅

早村　春鶴

猛宗の大空掃ひて春の雲
枝垂梅千の莟（つぼみ）の満を持す
軒しずく一滴きらり風光る
中指にペン胼胝（たこ）見へて大試験
出航の訓練艦艇春の海

中仙道にて

一谷　春窓

痩せし腕負けじと凧の糸を引く
春燈や宿場名残りの常夜燈
奥深き馬籠の宿の夜半の春
格子戸の広き奥行黄楊（つげ）の花
山にあるごとくに活けて緋木瓜（ぼけ）の間

紅　梅

山本　春英

紅梅の小枝をゆらす風一陣
盆梅のつぼみふくらむ日射し得て
今日立春新曲いどむ心地して
春立つ日ヨチヨチ歩く二歩三歩
先陣を切る小白鳥（こはくちょうとりくも）雲に

※末黒野（すぐろの）

森本　智子

木の鳥居くぐり水汲む春立つ日
井戸端の母の好みし梅ふふむ
早春や青年の木の青青と
蝶の羽化命支へる細き糸
末黒野を行くせせらぎのいづくより

小さな春

坂井　白萩

春寒し窓際の席敬遠す
高架下紅梅一枝花一輪
黄色にはまだまだ遠き花ミモザ
早春の車窓は額縁富士の山
子規庵（しきいおり）ガラス戸越しの春の園

※末黒野…野焼きを終えて焼けこげた色が黒くなった野のこと